第2節　学習に対する意識の比較

1．成績観

(1) 現在の成績の自己評価

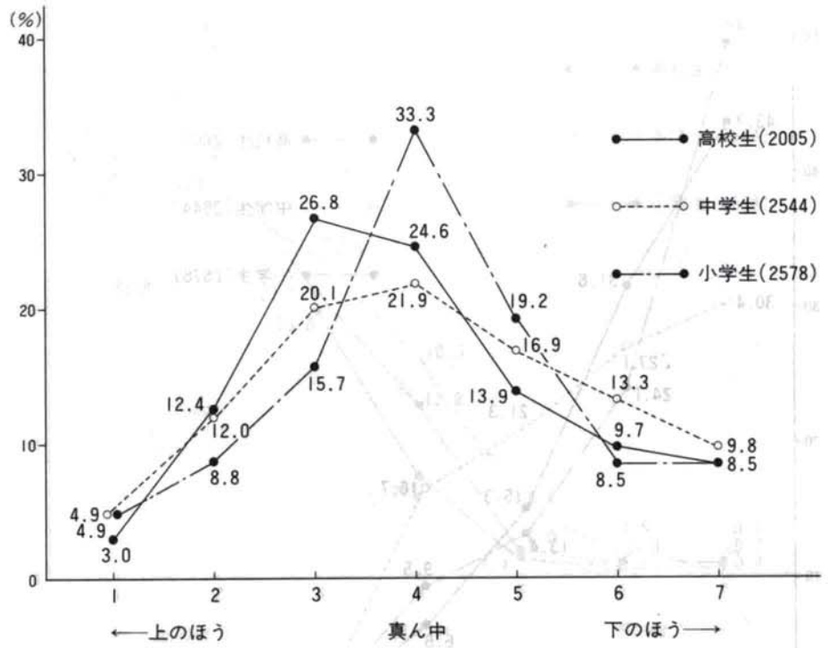
【やや高位に偏る高校生、中位集中型の小学生。】（図3－8）

現在の総合的な成績を自己評価させてみると、第一に小学生では、中・高校生と比較して自分の成績を「真ん中くらい」に位置づける者が多いことが目立つ。中・高校生になるとそれが両端に向けて徐々に分化していく。

学校段階の上昇とともに、学校（学級）集団の中での学業上の序列が次第に明確になっていくことの現れと考えられる。

高校生は「中の下」（カテゴリー5）、「下の上」（同6）が相対的に少なく、「中の上」（同4）が多いという、やや成績高位に偏った分布を示している。

図3－8　現在の成績自己評価



注）（　）内はサンプル数。

⑵ どのくらいの成績がとれたらいいか

【小学生と高校生は類似した分布、中学生の希望は控え目。】（図３－９）

どのくらいの成績がとれたらいいと思うかを尋ねると、小学生、中学生、高校生ともに、中位から下の成績（カテゴリー５、６、７）でよいとするものはごく少数派である。学校段階による違いが現れるのは、中位以上の回答傾向である。ここでは高校生と小学生が似た分布を示し、中学生が特異である。最上位（カテゴリー１）の成績がとれたらいいとする者は、小学生で５割、高校生で44％に達するが、中学生では30％にすぎない。中学生はその分「中の上」から「中位」（カテゴリー４、５）でよいとする者が多い。仮にこの控え目な希望が学習意欲の反映であるとすれば、中学生のこうした成績観は問題視されてよい。

続いて、「現在の成績は別として、うんとがんばればどのくらいの成績がとれると思うか」を尋ねてみると（図３－10）、ここでも高校生の分布がやや高位に偏り、中学生のそれが低めに出ている。この設問は、いわば学業面での「能力の自己概念」を表すと考えられるが、今回の調査対象者に関する限り、高校生の学業的能力の自己概念は中学生よりも相対的に高くなっている。

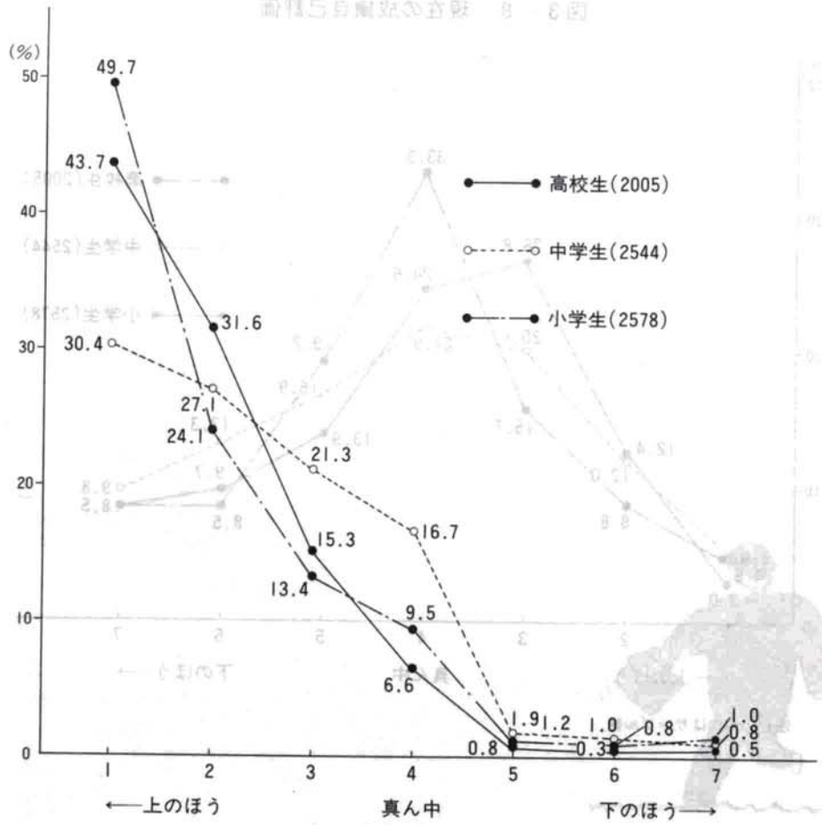
ただしこれらの傾向は、今回の調査対象（高校生）が、進学者が多くを占める公立普通科高校に限定されていることに起因している可能性がある。

⑶ よい成績をとるために大切なこと

【高校生は、第一に努力、第二に上手な勉強方法、第三に授業をしっかり聞くこと、とくに小学生よりも「上手な勉強方法」が多い。】（図３－11）

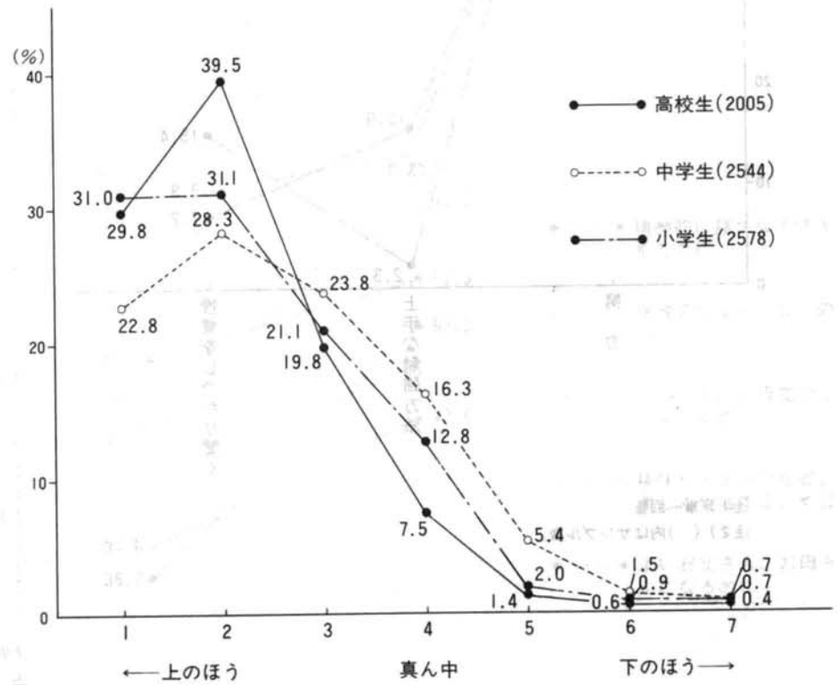
よい成績をとるためにはどんなことが大切か。この問いに対する回答は中学生と高校生とできわめて類似しており、第一に努力、第二に上手な勉強方法、第三に授業をしっかり聞くことがあげられている。小学生の回答は、第一に努力、第二に授業をしっかり聞くであり、これら以外は回答率が１割にみたない。高校生で第２位である「上手な勉強方法」をあげる小学生は、２％程度にすぎない。このことは、中学生以降になると小学生時代とは異なる学習の必要に迫られ、上手な勉強方法、学習上の技能の重要性を彼らが認識するようになることを示している。

図３－９　どのくらいの成績がとれたらいいか



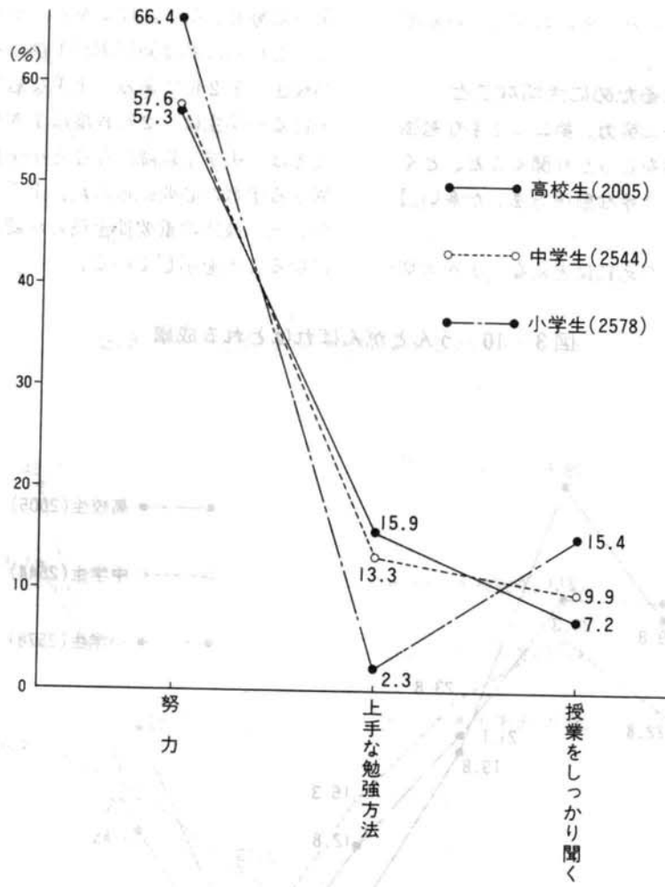
注）（　）内はサンプル数。

図３－10　うんとがんばればとれる成績



注）（　）内はサンプル数。

図３－11　よい成績をとるのに必要な努力



注１）単一回答。
注２）（　）内はサンプル数。

(4) 一生懸命勉強することの効用

【高校生になると、勉強の効用を限定的にみるようになる。】（図３－12）

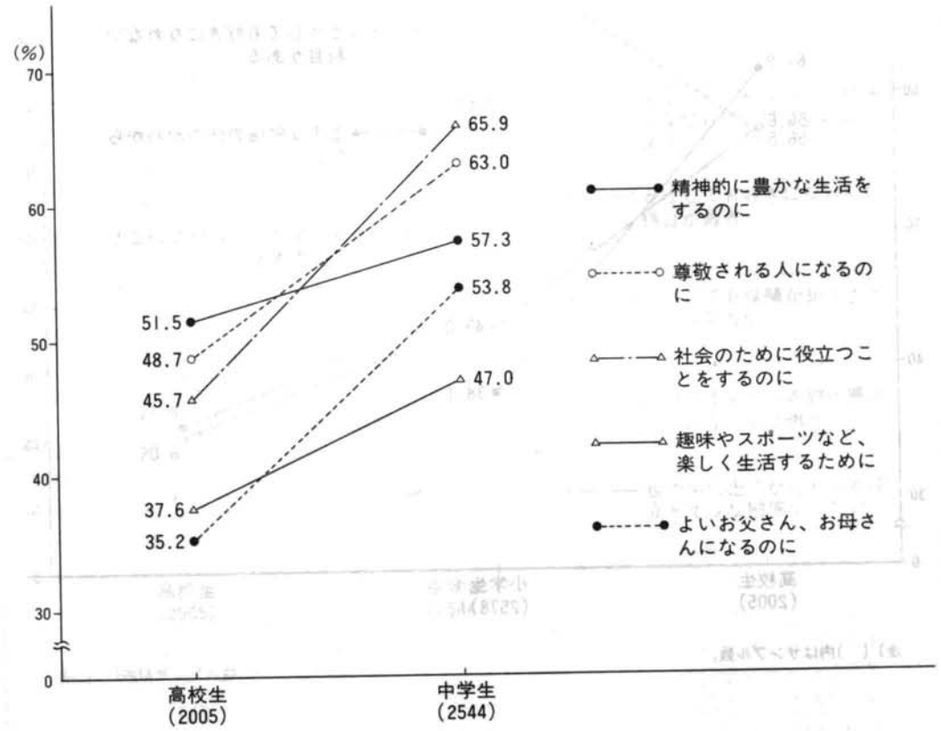
一生懸命勉強することは、どのようなことに役立つとみているのか。中学生と比較した場合、高校生は次の項目について、いずれも効用をより小さく評価するようになる。

①社会のために役立つことをするのに
②よいお父さん、お母さんになるのに
③尊敬される人になるのに
④趣味やスポーツなど、楽しく生活するために
⑤精神的に豊かな生活をするのに

これらの項目とは対照的に、①一流の会社に入るのに、②会社や役所に入って高い地位につく（出世する）のに、③お金持ちになって豊かな生活をするのに、という３項目については、中学生と高校生とでは差が小さい。

以上を総合して考えると、学歴の経済的、職業的な効用については、中学生と高校生とでは認識の差異は小さいが、いわば学歴の周辺的効用については、高校生はそれをより小さく評価するようになるといえる。学歴効用認識がより現実的となり、学歴信仰が限定された側面に絞られるようになるのである。

図３－12　勉強の効用



注１）数値は「とても役立つ」と「まあ役立つ」の合計。
注２）（　）内はサンプル数。

2. 学習上の悩み

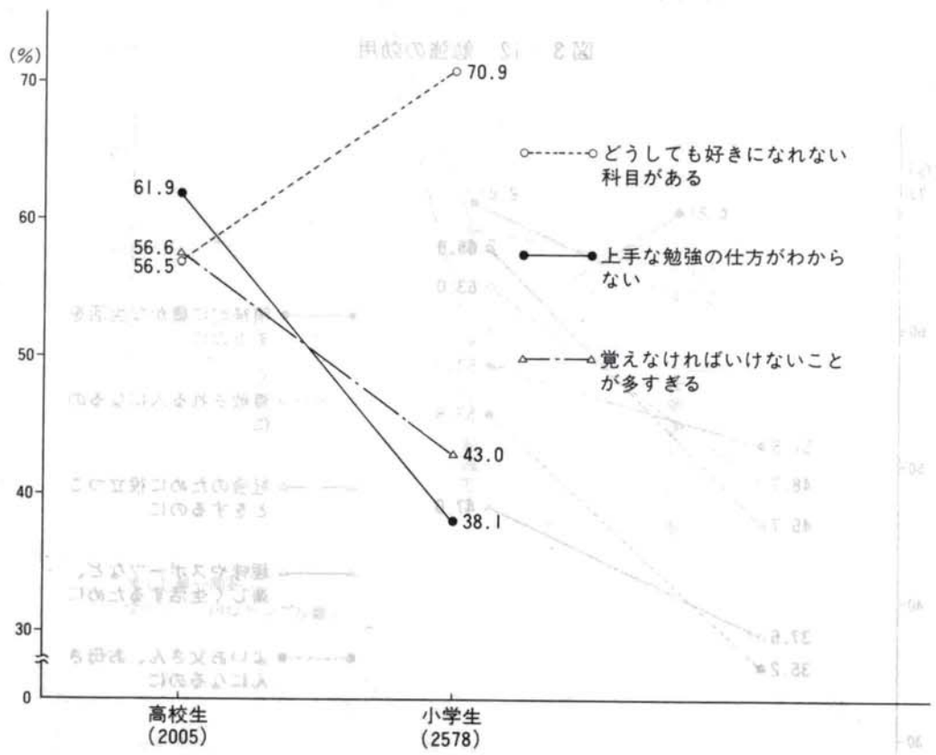
【中学生に比べて学習上の悩みは減少。ただし、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」という意識は強まる。】（図3－13、図3－14）

学習上の悩みは、大きく小学生と中・高校生とで異なる。中・高校生は小学生に比べて、「上手な勉強の仕方がわからない」「覚えなければいけないことが多すぎる」という回答が増加する。上手な勉強の仕方が知りたいというのは、今回の調査で一貫して表れている中・高校生の意識であり、教師もそれに十分応える指導が必要である。

中学生と高校生を比較してみると、多くの項目で中学生の数値が高校生を上回っている。それは学習上の悩みが高校生よりも中学生で大きなことを表している。

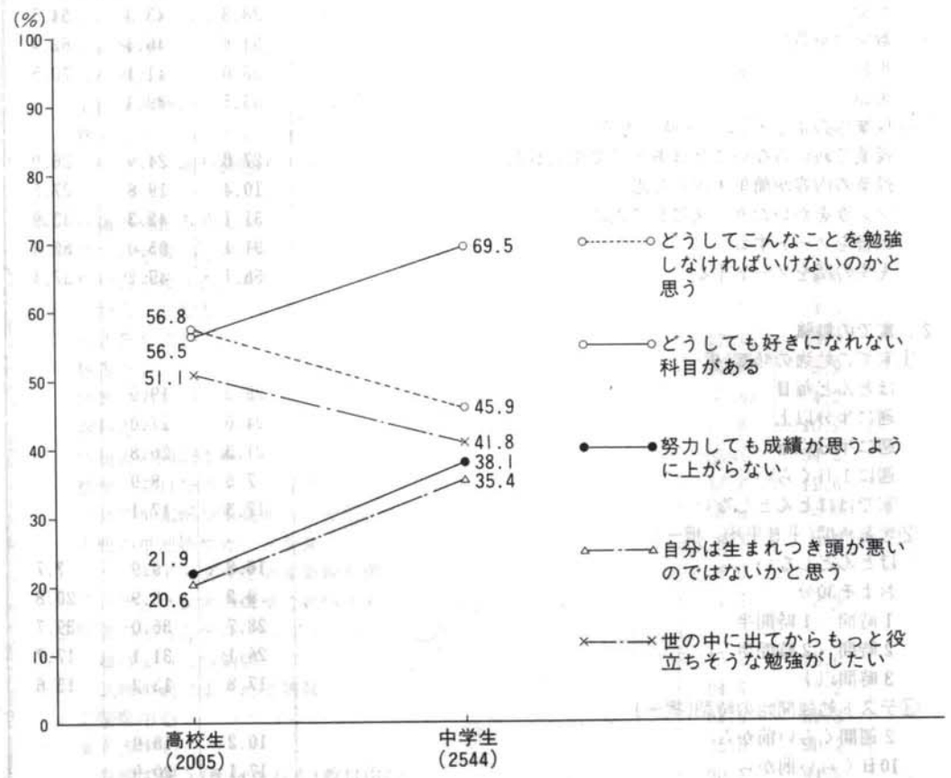
高校生で中学生よりも有意に数値が大きいのは、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てからもっと役立ちそうな勉強がしたい」の2項目である。いずれも要求されている学習の内容や、学習自体に対する疑義であり、学習の技術論のレベルでの悩みではない。それだけ、悩みの解決や指導に大きな困難がともなうことを予想させる。しかし、生徒たちの学習行動やそれを支える学習意欲の向上は、学習の技術を与えるだけでは実現できない。学習することの意義・価値や学習内容の重要性・効用についても生徒に理解させ、それを納得した上で学習する姿勢を育てる指導が重要だろう。

図3－13　学習上の悩み



注）（　）内はサンプル数。

図3－14　学習上の悩み



注）（　）内はサンプル数。